中勤助金錢帳

小宮豐隆
和辻哲郎 編集

中勘助全集

第二卷

角川書店

中勘助全集
第二卷

昭和三十六年一月三十日　初版發行
昭和四十年八月三十日　三版發行

定價一五〇〇圓

著作者　中勘助
發行者　角川源義
印刷者　中内あき子
製本者　鈴木俊一
發行所　株式會社角川書店
東京都千代田區富士見町二ノ七
振替口座　東京一九五二〇八番
電話(東京)(265)七二一一(大代表)

© K. Naka 1961　Printed in Japan
落丁・亂丁本はお取替へ致します

目次

提婆達多　三
犬　一九
菩提樹の蔭　三五

短篇（二）　二七五
島守　二七七
貝桶　三一
闘球盤　三三
母の死　三四〇
黒幕　三五七

チャリネ　三六二
柳先生　三六七
林園　三七二
本朝二十四孝　三七五
網ひき　三七七
きもの　三八八
あとがき　三九一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

提婆達多

前篇

一

釋迦族の一支流拘利族の王にして拘利の城主なるスプラブッドハ王が首圖馱那王を訪問するといふ噂は迦毗羅婆蘇都の全市を搖り動した。從來釋迦族の諸王のあひだには色々な理由から時々かうした交歡が行はれるのでたゞそれだけならばなんの不思議もないのであるが、今度はスプラブッドハ王がいつになく最愛の王女を同伴してくるといふことがなにか一大事でゞもあるかのやうに迦毗羅婆蘇都の城内から市の外壁の外にある賤民の小屋の隅々までに非常な期待と騒擾を惹起したのである。それは、人々は今度の訪問をひとつには王女の婿選みのためのものであると考へたからであつた。さて當の王の意中は知らず、此際慣例として同族の諸王のところから各王子たちが歡迎の宴に列るために名代として迦毗羅婆蘇都へ派遣され、招待されるので、當推量とはいひながらかやうな想像もまつたく據り處のないものではなかつた。主客雙方の重な人々は主人側では首圖馱那王、王子悉達多、同難陀、來賓側ではスプラブッドハ王、王女耶輸陀羅、阿難

都檀那王の名代王子提婆達多、道盧檀那王の名代摩訶那摩及第二王子阿兔樓駄、シュクローダナ王の名代跋提唎加、そのほか扈從の貴族高官たちであつた。スプラブッドハ王は別としてこれらの諸王は皆兄弟なので、從つていふ迄もなくこれらの王子たちは從兄弟同士であり、首圖駄那王とは伯父甥の間柄であつた。

迦毗羅婆蘇都は國賓歡迎の準備に湧きかへつた。天惠を享けて豐饒な國土に比較的安穩にして單調なる生活を營んでゐた古のこれらの人々——國王も臣民も——にとつてはかやうなお祭騷ぎはその政略上の理由はさておいてもやはりなくてならぬ最樂しい行樂のひとつであつた。そのうへ極めて善良であると同時にかなりな虛飾家であつた首圖駄那王は小國ながら全釋迦族の盟主たる己の地位に對して出來るだけ大な自信と矜持とをもつてたので、その富と力を有利に且愉快に誇示することの出來るこの絕好の機會を到底空しく看過することは出來なかつた。彼は大袈裟な國賓歡迎の最熱心な計畫者であつた。すべては手順よく運んだ。拘利と迦毗羅婆蘇都をつなぐ道路は貴賓の行列の通行にさしつかへないやうに注意深く修繕され、掃除された。隊商の車の轍はうづめられ、邪魔になる藪や倒れ木は截拂はれた。そして市外十町あまりのところを流れる川の渡渉場のこちらの岸から市城に接近して程よく擴つてる美しい草原まで一定の距離をおいて涼しげな綠門が建てられた。そこには豐滿限りなき印度の自然が供給するあらゆる色、あらゆる形、あらゆる匂の花と葉をもつて樣々な縞や模樣がつくられ、道路には一面毛氈のやうに柔い草木が

敷きつめられて惜しげもなく種々の香水がふりそゝがれた。そして迦毗羅婆蘇都の城は極樂鳥のやうに紅白紫黄の大旗小旗をもつて飾られた。まことにそれは熱帶の國のみがひとり誇り得るところの豪奢であつた。

二

當日太子の悉達多は美々しく裝うた一隊の儀仗兵を率ゐて道の半程にある檬果樹の森まで出迎へた。第二王子の難陀はこれも慣例に從つて前日から到著してる名代の王子たちの接伴役として後に殘つた。恐しくたどたどしい、そして妙に落ちつかない幾時が過ぎた。城壁の內外を問はず路傍、廣場、木の下、物蔭、到る處蟻のやうに群つて早朝から待ちくたびれてる市民の耳に遙に奏樂の音が聞えて彼等の胸を轟せた。それは國賓の行列が渡渉場を越えたことを知らせるための合圖に始められた先頭の迦毗羅婆蘇都宮廷音樂隊の奏樂である。それと同時に首圖馱那王をはじめ各王子大臣以下は城門から出て綠門の一方の口が例の草原に一大圓堂を造つてる處まで行つて行列の來るのを待ちうけた。樂の音は次第に高くなり、それに步調をあはす人馬の足並がだんだんはつきりと見えてくる。武器や、甲冑や、その他の金具の眩く光るのが見える。行列は綠門の切目へくるとぱつと日光に照されてまた次の綠門の蔭に沈んでしまふ。さうかうするうちに見るも可愛らしい先驅の一隊が現れた。それは迦毗羅婆蘇都の貴族の子供たちで、彼等は行列のは

るか先に雪白の駒を驅りながらその振立る頸の兩脇につけた花籠から間なく暇なく色々な花を散らして歩く。彼等は待設けた群集の最初の歡呼に無邪氣な笑顔をもつて答へながら王や貴賓たちのはうに一禮しつゝ草地を横ぎつて城門のはうへまでも花を撒きながら進んで行つた。波濤のやうな奏樂が歩一歩と近づいてきた。それは滿身花をもつて飾つた樂人たちが今日を晴れと力をこめて奏する太鼓、小鼓、笛、篳篥……等の合奏であつた。その次に牛革製の大盾を背負つた歩兵がつゞいた。彼等の或者は等身の弓を持ち、或者は短い投槍を持つて、そしていづれも重たい段平を帶びてゐた。それから思ひおもひの武裝をしたそれぞれの一隊が續いた後に最後に一樣に紺黑の馬に跨つて小盾と二筋の長槍を携へた騎兵の一隊が來た。人間の息と、獸の息と、汗の匂と、革具の匂と、蹂躙られる葉や花の匂と、香水の匂とが甘酸ぱく濛々といきれたつたなかを少し間をおいて大なる好奇心と期待をもつて目をみはつてる市民と若い王子たち——彼等は重要な利害關係をもつてるだけそれだけ一層緊張してゐた——のまへに、東道の悉達多王子の後から山のやうな額を並べてすばらしい二頭の白象が現れた。それは貴い香油で皮膚を磨かれて、鞦も、轡も、鞫も、悉く金色に輝いてゐた。そしてそのかた方の象轎には寶冠をいただき半白の長髯を垂れたスプラブッドハ王、他の方にはまだやうやく綻びそめた蕾の花の耶輸陀羅姫が乘つてゐた。萬人の眼は期せずして皆王よりはこのはうに集つた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

三

提婆達多の大な眼は鷹のやうに貪婪に輝いた。姫は純白の絹布を纏つて眞珠の頸飾とおなじ珠の手纏をつけてゐる。彼女は人々の眼にけおされるやうに伏目になつてるのでやさしげな瞳がなかば長い睫毛にかくれてゐる。彼女はどこもかしこも尋常に出來てるがどこといつてとりたてゝ人目をひくやうなところはない。たゞ體が程よくすらりとしていかにも釣合がよい。そして流石に王女にふさはしくどことなく靜に、奥ゆかしく、情深さうにみえる。

提婆達多は見た。そして

「なんだ」

と思つた。彼は勝手に孔雀のやうな乙女を想像してたのであつた。

「己はまあまつぴらだ」

いたくも期待を裏切られた彼は首圖默那王や他の王子たちと一緒に行列にくははつて城門をくぐりながらなんだかうまうまと騙されたやうな不滿を感じた。まことに耶輸陀羅はひとたび翼をふるつて衆鳥を驚かすところの孔雀ではなかつた。やさしい鷗であつた。

提婆達多は幼少の時から宮女たちの寵兒であつた。彼がまだ十歳をこすかこさぬほんの子供であつた時から既に彼を戀する女さへあつた。彼は彼等の嘆聲を耳にし、またその抱愛をうけてい

つしか己の容姿について抜きがたい自信、自負心をもつやうになつた。そしてそれが強くなればなるほど美しくない者に對する侮蔑の念が深くなつた。容姿、それは彼がすべての人間を評價するにあたつて常に最初の條件であつた。やうやく長ずるにしたがつて女たちの讃嘆は戀となり、抱愛は狂しい情慾となつた。彼が眉目秀麗なる一個の青年となつて烈しい慾望に戰きつゝ若い獸のやうに色を漁つた時彼の的となつた女は悉く手の下に狂喜して身心を獻げて奴隷となつた。提婆達多王子、それは三千の佳麗の耳朶に、嬉しく、甘く、懷しく、快い響をつたへる名であつた。彼は獅子のごとく雄々しい容貌と肉體をもつてゐた。加之彼の性格、所行とは似てもつかぬ、最初の一瞥をもつて全き信頼と愛慕とを獲得するに足るところの天成の氣品をそなへてゐた。そしてひとたび彼が相手の歡心を得ようとして笑顔をつくる時にかの獅子は忽然として愛すべき鳩となり、その巧妙な態度と話ぶりとはあらゆる彼の容貌の缺點——彼とてももとより缺點はあつた——を蔽ひかくすに十分であつた。かやうにして秋波と密語のうちに人となりつゝ、幸多き日のもとに生れて自ら位と富と力に事を缺かなかつた彼はひたすら女の渇愛の的となり、女に貪り飽くことをもつて第一の望としたのである。

四

翌日には城外の廣場で種々の競技が行はれた。廣場の一方をかぎつた涼しい尼拘樓陀の森の蔭

に天幕が張られてその柱は悉く花をもつて包まれた。迦毗羅婆蘇都の城主は拘利の城主と席を並べた。その傍にある意味で今日の競技會の司であるところの耶輸陀羅姫が座を占め、左右には各王子、貴族、そのほか宮女たちが綺羅星のごとくに列つた。廣場の周圍は兵卒、庶民等の群集によつて寸隙もないほどにとり圍まれた。

競技は萬人の胸を轟かす蓼々たる太鼓の連打によつて始まつた。競馬、徒步競走、相撲、槍術、競射等凡そ戰場に役立つべきあらゆるものはおほかた殘らず行はれた。雄壯な戰車競走がすんで最後の劍術の仕合になつた。首圖馱那王はこの仕合を特に王子たちのために選んだので、それは競技者にとつても見物にとつても容易ならぬものであつた。人々はその選手が各の支族を代表する王子であるといふことのほかになんとなくそこに優勝者への褒美として耶輸陀羅姫が賭けられてるやうに思つた。高貴な選手たちも同じ思であつたが、よしそれが事實とならうとなるまいと、假にも各我一族を代表して二人の王と、若い王女と、並居る廷臣と、宮女と、幾萬の人民のまへに、ひと度敗れては再び雪辱の日を期しがたい大事の仕合であると思へば彼等の胸は流石に烈しく鼓動せざるを得なかつた。彼等は支度のために席を立つて彼方の天幕のなかに姿を消した。

やゝあつて合圖の太鼓がひときは力强く鳴り渡つた。場内の空氣は妙にひきしまつた。その時王子たちは各甲冑に身を固め、面頰だけはつけずに小姓に持たせてかた手に小形の圓盾をさげながらしづしづと現れた。彼等の武者振はあつぱれ六人の神將のやうに見えた。中にも他に擢んで

て丈高く牡牛のやうに屈強な難陀と提婆達多の姿があたりをはらつてゐた。彼等が王たちの玉座にむかつて敬禮した時に首圖馱那王はこれらの頼もしい未來の釋迦族の支配者に對して抑へきれぬ矜りと喜びの微笑をもつて點頭いた。その時スプラブッドハ王からこの晴の仕合の一の勝利者への曳出物として前日王女の乘用となつたあのすばらしい白象が曳出された。それは鞦も、轡も、悉く黄金をもつて飾つたうへに金銀の瓔珞を纏はれ、珠玉を綴つた流蘇をかけられて、その背には純白の絹布を、そのうへに燃えたつやうな緋を敷き、さらに濃い紫をかさねてあつた。彼が山のやうな頭をゆさゆさとゆりながら象師に曳かれてのつさのつさと歩み出た時に人々は皆覺えず讃嘆の聲をもらした。もはや誰一人この象とともにかの王女が賭けられてることを疑ふ者はなかつた。利口な象は現在己の位置の如何なるものであるかをさとつたかのやうに大きな耳朶をあふつて心地よげに瓔珞の音をきゝながら鼻を卷きあげてひと聲高く吼えた。古の印度の日は驚嘆の眼をみはつてこの場の光景を見降した。首圖馱那王は我劣らじと、釋迦族の重寶といはれてゐるかの驍勇かくれなかつた父シンハハヌ王の手馴れの弓を賭けた。それは故王が數しれぬ戰に於て刃向ふ敵の膽を寒からしめた名だたる強弓である。王子たちは身うちの戰くのを覺えつゝ首圖馱那王の手から鍵をひいた。

彼等は鍵によつて二人づつ三組に分れた。跋提唎加と難陀、阿嵬樓馱と悉達多、摩訶那摩と提婆達多。これらの各組の勝利者三人のあひだに仕合が繰返されて最後の優勝者が稀代の賭物を

授かる名譽と福德とを得るのであつた。

五

難陀と提婆達多はやすやすと勝つた。悉達多は苦戰の末わづかに勝利者の數に入つた。首圖馱那王は二人の王子が揃ひも揃つて勝利者となつたことを內心ひどく喜んだ。三人のあひだにふたゝび籤がひかれた。そして先づ難陀と提婆達多とが勝負をすることになつた。提婆達多はやをら立ちあがつて小姓の捧げる面頰をうけとりながらじつと相手の樣子を見た。王子たちはいづれも釋迦族の名を辱めぬほどの武藝のたしなみはもつてたけれど就中難陀と提婆達多ははるかに一頭地をぬいてゐた。それ故最初から提婆達多の眼中には難陀のほか敵はなかつた。その堂々たる容姿といひ、力量といひ、手練といひ、彼のみが恐るべき敵であつた。難陀のはうでもおなじだつた。人々の思もおなじだつた。それ故二人が立ちあがつた時に場內はどよめき渡つた。人々は異樣に緊張して二人の一擧一動をも見逃すまいとした。首圖馱那王は氣が氣でなかつた。彼は雷に我子の一人を勝利者たらしめたかつたのみならず一族の重寶をなるべくならば我家にとゞめておきたかつた。

難陀は提婆達多を見て微笑みながら面頰をつけた。提婆達多も面頰をつけた。彼は頭をふり二三遍兩肱をあげて肩をゆするやうにしてみた。重たい甲冑の革具がきゆつきゆつと鳴つた。彼等

は長劍をすらりと拔いて互に右手をまつすぐに敵のはうへのばしちやうど劍尖と劍尖とが觸れあふ點に姿勢を正して心に因陀羅を念じつゝ一禮をかはした。勿論劍は危險のないやうに刃をひいて切先を鈍らしてあつた。禮が終ると同時に彼等は「ヤツ」と聲をかけて左手の盾を前に右足をひいて斜に身を構へた。磨きあげた靑銅の盾がぎらぎらと日光を反射した。人々は鳴りをしづめて固唾を呑んだ。二人は盾で身をかばひながら敵に毛ほどの虛もあらばつけ入らうとして窺ひあふ。彼等のあひだにはなにか目に見えぬ軛のやうなものがあつて支へるものの如く、一定の距離をとつたなり二匹の牛の戰ふやうに凄じく、しかも靜にじりじりと一進一退する。熱しやすい提婆達多はこみあげてくる敵意が抑へきれなくなつた。彼の眼は血走つた。五體のふるへるのを感じた。そこで彼はわざとすこし退くやうに見せかけた。そして難陀がつけ込んで踏み出さうとするはずみを捕へ後へひいた右足で碎けるばかり地を蹴つて豹のごとく身を躍らせながら「ホー」と聲をかけつつ鐵壁もとほれと敵の胸を目がけて突込んだ。難陀は身を退く暇もなく電光石火と盾をもつて撥ねのけながら反對に鋭く一突を加へるのを提婆達多は巧にがちりと盾でうけとめてさつと飛びしさつた。人々の口から我知らず感嘆の聲が漏れた。二人は最初の一合で互に敵の恐るべきことを知つた。それからやゝ暫の間彼等は互に虛を見出さうとして右へ右へと廻りあつてたが忽ち雙方同時に突進して猛烈に突きあつた。盾と劍と、劍と劍と、盾と盾と、打ちあひ觸れあふ音がひとしきりつゞいた。さうして息をつぐまもなく喚き叫んで戰つてるうち終に提婆達多

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.